

第四十節の隠された歴史 — 第二十二番

エゼキエル 第三番号

Jeff Pippenger

2026-08-08

エゼキエルは、十四万四千人への印が押される期間における祭司である。第一章において、エゼキエルは聖所へと連れて行かれる。

さて、第三十年の第四の月の五日に、私がケバル川のほとりで捕囚の民の中にいたとき、天が開かれ、私は神の幻を見た。その月の五日、すなわちエホヤキン王の捕囚の第五年に、主の言葉がカルデヤ人の地、ケバル川のほとりで、ブジの子である祭司エゼキエルに明確に臨み、そこで主の御手が彼の上にあった。

私が見ていると、見よ、北の方からつむじ風が来た。大いなる雲と、みずからのうちに巻き込む火とがあり、その周囲には輝きがあった。そのただ中からは、火のただ中より、琥珀のような色のものが現れた。またそのただ中から、四つの生き物の姿のようなものが現れた。これが彼らの有様であった。彼らは人のような姿をしていた。おのおの四つの顔を持ち、おのおの四つの翼を持っていた。彼らの脚はまっすぐであり、その足の裏は子牛の足の裏のようで、磨かれた青銅の色のように輝いていた。彼らはその四方の翼の下に人の手を持っていた。四つのものは、その顔とその翼とを備えていた。彼らの翼は互いに結び合わされていた。彼らは進むとき向きを変えず、おのおのまっすぐ前方へ進んだ。彼らの顔の様はこうであった。四つのものは、右の側に人の顔と獅子の顔を持ち、左の側には四つのものが雄牛の顔を持ち、また四つのものは鷲の顔を持っていた。彼らの顔はそのようであった。彼らの翼は上に伸ばされ、おのおの二つの翼は互いに結び合わされ、他の二つはその身を覆っていた。

彼らはおのおのまっすぐに進み、霊の行こうとする所へ行き、進むときに向きを変えることはなかった。生きものたちの有様は、燃える火の炭のようであり、また松明のように見えた。その火は生きものたちの間を行き巡り、その火は輝いていて、その火の中から稲妻が出ていた。生きものたちは稲妻のひらめきのように走り、また戻っていた。私がおの生きものたちを見ていると、見よ、一つの輪が地の上であって、その生きものたちのそばにあり、その四つの顔に対応していた。輪の有様とその造りは緑柱石のように見え、四つとも同じ形をしていた。その有様とその造りは、あたかも一つの輪の中にもう一つの輪があるようであった。それらが進むときは四方のいずれにも進み、進むときに向きを変えることはなかった。その輪縁は高く、恐るべきものであり、その四つの輪縁は周囲一面に目で満ちていた。生きものたちが進むときには輪もそのそばで進み、生きものたちが地から上げられるときには輪もまた上げられた。霊の行こうとする所ならどこへでも、それらはそこへ行った。そこに彼らの霊もまた行こうとしていたからである。輪はそれらに伴って上げられた。生きものの霊が輪の中にあっただからである。

それらが行くとき、これらも行き、それらが立つとき、これらも立った。またそれらが地から上げられるとき、輪もそれらに伴って上げられた。生きものの霊が輪のうちにあったからである。生きものの頭の上にある大空のさまは、おそるべき水晶の輝きの

ようであり、その頭の上に広がっていた。大空の下では、それらの翼は互いにまっすぐに伸べられていた。それぞれに二つの翼があって、こちら側をおおい、それぞれまた二つの翼があって、あちら側、すなわちその身をおおっていた。それらが行くとき、私はその翼の音を聞いた。それは大水のとどろきのようであり、全能者の御声のようであり、語る声のようであり、軍勢のとどろきのようであった。それらが立つときには、その翼を垂れた。また、それらが立ってその翼を垂れたとき、その頭上の大空から声があった。その頭上の大空の上には、王座のようなものがあり、それはサファイアの石のように見えた。王座のようなものの上には、その上方に人のように見えるものがあった。私はまた、その腰のように見えるところから上の方にかけて、その内側の周囲に火のようなものがあり、こはくの輝きのように見えるのを見た。また、その腰のように見えるところから下の方にかけても、火のように見えるものを見た。そしてその周囲には輝きがあった。その周囲の輝きのさまは、雨の日に雲の中にある虹の見え方のものであった。これが主の栄光のさまの現れであった。私はこれを見てひれ伏した。そして、語る者の声を聞いた。エゼキエル1:1-28。

「嘆きのうちにある捕囚の預言者エゼキエルは、カルデヤ人の地において、イスラエルの力ある神への信仰という同じ教訓を示す幻を与えられた。彼がケバル川のほとりにいたとき、北からつむじ風が来るように見えた。『大いなる雲と、その中で燃え上がる火があり、その周囲には輝きがあり、その中央からは琥珀のような色のものが現れた。』互いに交差する異様な姿の幾つもの輪が、四つの生き物によって動かされていた。これらすべてのはるか上には、『サファイアの石のように見える王座の形があり、その王座の形の上には、その上に人の姿のように見えるものがあった。』『生き物の姿について言えば、その見えるさまは燃える火の炭のようであり、また、ともしびのようであった。その火は生き物の間を行き巡っており、その火は明るく、火の中から稲妻が走り出ていた。』『また、ケルビムのうちに、その翼の下に人の手の形が見えた。』」

「互いの中にある輪があり、その配置はあまりにも複雑であったため、ひと目には、それらはみな混乱しているようにエゼキエルには見えた。しかし、それらが動くときには、美しい正確さをもって、完全な調和のうちに動いた。天の存在たちがこれらの輪を動かしており、そしてその上には、栄光に満ちたサファイアの御座の上に、永遠なるお方がおられた。また御座の周囲には、恵みと愛の象徴である虹が取り巻いていた。この光景の恐るべき栄光に圧倒されて、エゼキエルはひれ伏したが、そのとき一つの声が彼に、起き上がって主の言葉を聞けと命じた。それから彼には、イスラエルに対する警告の使命が与えられた。」『証集』751頁。

ウジヤ王の死んだ年に、私はまた主が高く上げられた御座に着いておられるのを見た。御衣の裾は神殿に満ちていた。その上にはセラフィムが立っていた。各々六つの翼があり、その二つで顔をおおい、その二つで足をおおい、その二つで飛んでいた。彼らは互いに呼び交わして言った、「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。全地はその栄光に満ちている」と。叫ぶ者の声によって、戸口の敷居は揺り動かされ、家は煙で満たされた。そこで私は言った、「わざわいだ、私は滅びるばかりだ。私は汚れた唇の者であり、汚れた唇の民の中に住んでいる。それなのに、私の目は王なる万軍の主を見たのだ」と。するとセラフィムの一つが私のところへ飛んで来た。その手には、祭壇の上から火ばさみで取った燃える炭があった。彼はそれを私の口に触れさせて言った、

「見よ、これがあなたの唇に触れたので、あなたの咎は取り去られ、あなたの罪はきよめられた」。私はまた、主の御声がこう言われるのを聞いた、「わたしはだれを遣わそうか。だれがわれわれのために行くだろうか」。そこで私は言った、「ここに私がおります。私を遣わしてください」。イザヤ書 6:1-8.

「この幻は、エゼキエルの心が暗い予感に満たされていた時に与えられた。彼は、自らの父祖の地が荒れ果てているのを見た。かつて人で満ちていた都は、もはや住む者がいなかった。喜びの声も、賛美の歌も、その城壁の内にはもはや聞かれなかった。預言者自身もまた、果てしない野心と残忍な暴虐とが至上の力を振るう異郷にあって、寄留の身であった。人間の圧制と不正について彼が見聞きしたことは、その魂を苦しめ、彼は昼も夜も激しく嘆いた。しかし、ケバル川のほとりで彼の前に示された驚くべき象徴は、地上の支配者たちの力よりもはるかに強大な、万物を統べ治める力を明らかにした。高慢で残忍なアッシリアとバビロンの君主たちの上に、憐れみと真理の神が御座に着いておられた。」

預言者にとってそのような混乱に巻き込まれているように見えた車輪のような複雑な働きは、無限なる御手の導きのもとにあった。これらの車輪を動かし、導いておられるものとして彼に示された神の御霊は、混乱の中から調和をもたらした。このように、全世界は神の支配のもとにあった。栄化された無数の者たちは、悪人たちの力と方策をくつがえし、神に忠実な者たちに益をもたらすために、神の御言葉ひとつで備えを整えていた。

「同様に、神は、来たるべき時代にわたる教会の歴史を、愛するヨハネに開示しようとされたとき、燭台の間を歩む『人の子のような者』を彼に示すことによって、救い主が御自分の民に寄せておられる関心と配慮との保証をお与えになった。その燭台は七つの教会を象徴していた。ヨハネは、地上の諸権力と教会との最後の大いなる闘争を示された一方で、忠実な者たちの最終的な勝利と救出をも見ることを許された。彼は、教会が獣とその像との致命的な戦いへと引き入れられ、その獣を拝むことが死の苦痛をもって強制されるのを見た。しかし彼は、戦いの煙と喧噪の彼方に目を向けると、小羊とともにシオンの山に立つ一群の者たちを見た。彼らは獣の刻印の代わりに、『その額に父の名が記されて』いたのである。さらに彼は、『獣とその像とその刻印とその名の数とに打ち勝った者たちが、神の琴を手にして、ガラスの海のほとりに立ち』、モーセの歌と小羊の歌とを歌っているのを見た。」

「これらの教訓は、私たちの益のために与えられている。私たちは神に対する信仰を堅く保たなければならない。というのは、まさに私たちの前途には、人々の魂を試みる時があるからである。キリストはオリーブ山において、その再臨に先立って起こるべき恐るべきさばきを詳しく語られた。『また戦争と戦争のうわさとを聞くであろう。』『民は民に、国は国に敵対して立ち上がり、方々にききんと疫病と地震があるであろう。これらはみな産みの苦しみの初めである。』これらの預言は、エルサレムの滅亡に際して部分的な成就を見たが、さらに直接的には終わりの日に適用されるのである。」

「わたしたちは、大いなる厳粛な出来事の敷居に立っている。預言は急速に成就しつつある。主は戸口に立っておられる。まもなく、すべての生ける者にとって圧倒的な関心と呼び起こす一時期が、わたしたちの前に開かれようとしている。過去の論争は再

燃し、新たな論争が起こるであろう。わたしたちの世界において展開されるべき光景は、いまだ夢にも思われていない。サタンは人間の機関を通して働いている。憲法を改変し、日曜遵守を強制する法律を成立させようと努めている者たちは、その結果がどのようなものとなるかをほとんど理解していない。危機はまさにわたしたちの目前に迫っている。」

「しかし、神の僕たちは、この大いなる非常時において、自分自身を頼みとしてはならない。イザヤ、エゼキエル、そしてヨハネに与えられた幻の中に、私たちは、天が地上に起こっている出来事といかに密接に結びついているか、また、神に忠実な者たちに対する神の顧みがいかに大いなるものであるかを見るのである。世界は支配者なしにあるのではない。来たるべき出来事の計画は主の御手の中にある。天の大君は、その教会に関わる事柄と同様に、諸国民の運命をも、みずからの責任のもとに置いておられる。」

「私たちは、主の御業において、あまりにも多くの心配、苦労、当惑を自ら感じることを許している。有限な人間が責任の重荷を担うために取り残されているのではない。私たちは神に信頼し、神を信じて、前進する必要がある。天の使者たちの疲れを知らぬ警戒と、地上の人間たちに関わる彼らの奉仕における絶えざる働きとは、車輪の中の車輪を導いておられるのが神の御手であることを示している。神なる教師は、かつて古のキュロスに告げられたように、その御業に携わるすべての者にこう言っておられる。『あなたはわたしを知らなかったが、わたしはあなたに帯を締めた。』」

「エゼキエルの幻において、神はケルビムの翼の下に御手を置かれていた。これは、彼のしもべたちに成功を与えるのは神の力であることを教えるためである。もし彼らが不義を捨て、心と生活において清くなるならば、神は彼らと共に働かれる。」

「いわずまの速さで生き物たちの間を行き巡る輝く光は、この働きがついには完成へと向かって進展するその速やかさを表している。まどろむことなく、絶えず御旨の成就のために働いておられるお方は、その大いなる御業を調和のうちに推し進めることがおできになる。有限な人間の思いにはもつれ合い複雑に見えるものも、主の御手は完全な秩序のうちに保つことがおできになる。主は、悪しき者たちの企てをくじく方途と手段を備えることがおできになり、御自分の民に害を加えようとたくらむ者たちの謀議を混乱に陥れられるのである。」

「兄弟たちよ、今は嘆き悲しみ絶望する時ではなく、疑いと不信に身を委ねる時でもない。キリストはもはや、大きな石で閉ざされ、ローマの封印で封じられたヨセフの新しい墓の中におられる救い主ではない。私たちには復活された救い主がおられる。彼は王であり、万軍の主である。彼はケルビムの間に座しておられ、諸国民の争いと騒乱のただ中にあっても、なおその民を守られる。天にあって統べ治めるお方こそ、私たちの救い主である。彼はあらゆる試練を量られる。彼は、すべての魂を試さなければならぬ炉の火を見守っておられる。王たちの砦が打ち倒される時、神の怒りの矢がその敵の心を射貫く時にも、その民は御手のうちにあって安全である。」『Testimonies』第5巻、752-754.

エゼキエルは十四万四千人のうちに数えられる候補者たちを表しており、また、彼の聖所における経験は、一つ一つ積み重ねられるようにして、イザヤおよびヨハネの聖所内

における経験と一致している。私たちは今、神殿の試験、すなわち十四万四千人に封印を施す三つの試験のうちの第二の試験の中にいる。その期間は、マラキ書第三章の成就として契約の使者によって成し遂げられる清めである。この三つの試験から成る清めの過程こそ、マラキの火の「炉」であり、「すべての魂を試さなければならない」ものである。1844年10月22日に第三天使が到来したとき、契約の使者は突如として御自分の神殿に来られ、その時代の賢い乙女たちを至聖所へと導き、御自分の忠実な者たちに封印を施そうとされたが、その時代の乙女たちは反逆し、1856年までにフィラデルフィアのミラー派運動はラオデキヤのミラー派運動へと変質し、1863年にはラオデキヤのセブンスデー・アドベンチスト教会となった。

1844年10月22日に突如として到来した第三の天使は、1863年にその臨在を退き、その後2001年9月11日に再び帰来した。その二十五年後、1844年10月22日に予表されていた神殿の試験が、いま繰り返されつつある。二十五は象徴的に二百五十の預言的十分の一であり、二百五十はダニエル書11章11節から15節に表される歴史の象徴である。二百五十、そして二十五は、エゼキエルの聖所の幻の中にある車輪である。二十五は、契約の使者によって成し遂げられる清めの働きの中に示される三段階の試験過程の成就として、賢明な者と悪しき者との分離の象徴である。

マタイによる福音書第二十五章には三つのたとえが含まれており、それぞれのたとえは、十四万四千人の印の時における賢い者と悪しき者との分離を示している。この章に表されている神の民の希望は、真夜中の叫びのメッセージという油を持つ賢いおとめであることにある。彼らの希望は、自らの個人的な恩恵期間において、自分たちに管理を託された特別なタラントを用いる務めに関し、忠実な僕であると裁かれることである。彼らの希望は、神の牧場の羊として、その右に着かせられ、その左の山羊ではないと裁かれることである。二十五は、十四万四千人の印の時における賢い者と悪しき者との分離の象徴である。二十五はエゼキエルの車輪の一つである。

われわれの捕囚の第二十五年、年の初め、その月の十日、すなわち都が打たれてから十四年目のその日そのものに、主の御手がわたしの上に臨み、わたしをそこへ携えて行った。エゼキエル 40:1。

捕囚の二十五年目は、十月二十二日より表されており、それはまた、ある時代区分上の戸が閉じられることによって表されている。1844年10月22日に、一つの戸が開かれ、また一つの戸が閉じられたが、それは二つの階級が分けられた時であった。

フィラデルフィアにある教会の御使いに書き送れ。聖なる方、真実なる方、ダビデの鍵を持つ方、開けばだれも閉じることがなく、閉じればだれも開くことのない方が、こう言われる。わたしはあなたの行いを知っている。見よ、わたしはあなたの前に開かれた門を置いた。だれもこれを閉じることはいできない。あなたには少しばかりの力しかないが、わたしの言葉を守り、わたしの名を否まなかったからである。黙示録 3:7, 8。

キリストはフィラデルフィアの御使いに対し、彼らのわざを知っておられること、そしてフィラデルフィアの教会の前に一つの開かれた門を置かれたことを告げておられる。その門は、「ダビデのかぎ」、すなわちエルヤキムの上に置かれるかぎによって開かれて

いる。

その日には、わたしはわがしもべ、ヒルキヤの子エリアキムを召す。わたしは彼にあなたの衣を着せ、あなたの帯を強く締めさせ、あなたの支配をその手にゆだねる。彼はエルサレムの住民とユダの家にとって父となる。わたしはダビデの家の鍵をその肩に置く。彼が開けば、だれも閉じることがなく、彼が閉じれば、だれも開くことがない。イザヤ 22:20-22.

エルヤキムが召されるその日、彼は悪しきシェブナから分けられる。

万軍の主なる神はこう仰せられる。さあ、あの家をつかさどるこの庫吏、すなわちシェブナのもとへ行ってみよ、『おまえはここに何を携えているのか。またここにだれがいるというのか。おまえはここに、自分のために墓を掘り、まるで高い所に自分の墓を掘る者のように、岩の中に自分のための住みかを刻んだ。見よ、主はおまえを激しく投げ出し、必ずおまえを包み込まれる。主はおまえをまりのように激しく巻いて、大きな国へ投げ込まれる。おまえはそこで死に、そこでおまえの栄光の戦車は、おまえの主の家の恥となる。』イザヤ22:15-18.

シェブナとエルヤキムの比喻を成就した賢い処女と愚かな処女の分離は、1844年10月22日に成就し、また、それはエホヤキン捕囚の第二十五年、すなわち紀元前573年10月22日においても成就した。エゼキエル書第八章において、エルサレムによって表象されるアドベンチズム内の悪しき者たちは、太陽に向かってひれ伏す二十五人の男たちによって表されている。エルサレムの滅亡は日曜法を表象しており、それはまた十四万四千人の封印の時を終結させる道標でもある。その封印の時は2001年9月11日に始まり、イエスはアルファでありオメガでもあるゆえに、封印の始まりとしての2001年9月11日は、日曜法における終わりをも例証している。

2001年9月11日は、1888年のミネアポリス会議によって予表されていた。というのは、ホワイト姉妹が、ニューヨークの大建造物群が9/11に崩れ落ちたとき、黙示録18:1-3が成就したと認定しているからである。その時、1888年におけるのと同様に、彼女は、黙示録18章の御使いがその栄光をもって地を照らすために降ったと認定した。1888年の反逆を、彼女はコラ、ダタン、アビラムの反逆と並べ、その際にもまた、名のある者二百五十人が彼らの背教に加わっていた。古代イスラエルの初期の歴史におけるコラとその一味の反逆における二百五十人の反逆者は、古代イスラエルの終末において太陽を拝んでいた二十五人を予表していた。

日曜法の前にひれ伏すラオディキア派アドベンチズムの二十五人の指導者と、9/11における二百五十人とは、封印の時の始まりと終わりを示すために、二十五という象徴（賢い者と悪しき者との分離の象徴）をもって、封印の時を提示している。モーセの時代における二百五十人の反逆者であれ、エゼキエル書第八章の二十五人の男たちであれ、マタイによる福音書第二十五章における分離についての三つの証しであれ、あるいはエゼキエル書第四十章における捕囚の第二十五年であれ、二十五という象徴のあらゆる顕れは、それぞれ紀元前207年、313年、2026年にその結末へと達した三つの二百五十年の期間と一致している。

二十五は、いわば車軸であり、二十五のすべての線を完全へともたらす二十五である。それは、四十節の隠された歴史に明確さをもたらすために、ペテロに与えられた王国の預言的な鍵の一つとなる。ダニエル書十一章十節から十五節が、一九八九年から日曜休業令に至る歴史、すなわち四十節の隠された歴史を包含する一つの線を表していることは、三人を超える証人によって繰り返し確立されてきた。ユダ族の獅子は今、終わりの日の真夜中の叫びのメッセージを完成させる隠された歴史を開きつつ、エゼキエルの車輪の封印を解いておられる。

以下の記事において、私たちは、終わりの日における人々の複雑な相互作用を表すエゼキエルの車輪を引き続き明らかにしていく。本稿の冒頭に掲げたエゼキエル書第一章、および併せて示した『証の書』第五巻の一節を、これらの記事を進めるにあたって継続的な参照点とする。車輪がその正しい位置に置かれ、また預言史の他の車輪との正しい交差関係において示されるとき、私たちは、1840年8月11日に第一の天使に力を与えた三百九十一年十五日が、エゼキエルによってもまた三百九十年として表されており、それがエルサレム包囲の一年半と結び付いていること、さらに、この預言的光の到来が十四万四千人の旗の掲揚を示すものであることを論証するであろう。

1299年7月27日から1337年に至るまでの期間は、黙示録第九章十節にある百五十年（五か月）の初めに当たる三十八年を表している。その百五十年は、同章十五節の三百九十一年と十五日に結び付いている。したがって、この二つの期間の起点は一つの預言の線を構成しており、それはジョサイア・リッチによる1838年および1840年の予測の成就をもって終結し、ミラー派運動の勃興と力の付与を画した。アドベンチズムの初めにおけるその歴史は、日曜法に先立つ旗印としての十四万四千人の勃興を示している。ゆえに、エゼキエルの三百九十年と、エルサレム包囲の一点五年（1.5）は、1299年に始まったその預言の線の終わりを画している。

次の記事に先立って、『Testimonies』第5巻のその一節を検討しておくことは有益であろう。